

〔伊呂波字類抄加〕鴈カ 鴻コ 鴈コ

〔八雲御抄三下〕鴈 八月柳のするに風ふく時とこよの國より來て、二月にかへるといへり、つ

ばくらめにかはるよし、見萬葉、万につまよふと云 ふみつかひといへり 朝には海邊にあ

さる、夕されば山べをこゆるかりとよめり、まことにもまかり、あさなきてゆきしかりがねと

云 万、きなく、はつ 歸はつたかりがね 万にそのはつかりの使と讀り、初五字に九月とあ

り、九月もなをはつかりとはいふべし、凡かりの使は蘇武事よりおこる、たがたまづさをかけ

てきつらんなどいへる此心なり、又うすゝみにかくたまづさに似は、雁の飛たる也、ことに

も寄 つばさ おほるは あまとぶや かりがねは 雁聲也、只雁を云にあらす、かりのとも、

雁かともよむ同事也、又あめわかひこの射ころされたるをり、はやかせをやりて、かばねをそ

らへのぼせけるに、かり、すゝめ かやぐきなど、もろくの鳥を爲使と云、是は不限雁使也、

〔藏玉和詞集春〕二季鳥 雁春秋歸來

何方を故郷とてか二季とり年に二たびゆき歸るらむ

〔大上臈御名之事〕女房ことば 一がん くらおとり、またがんとも、

〔日本釋名中〕雁 かへり也、春は北にかへる中を略せり、北にかへる鳥多しといへ共、就中雁のか

へるは鳴わたりていちじるし、又雁は北にかへりて、秋は此地にてもとの所にかへるもの也、

〔東雅禽十七〕雁カリ 天稚彦の死せし時に、河雁、鵞、翠鳥、雀、雉、鷓、鴒、鳥等をして、葬事に従はしめし

といふ事、舊事紀古事記、日本紀等に見えたり、○中 是等の鳥の名、既に其代に聞えて、其名づけ云

ひし所の義の如き、今は隠れて知るべからぬ事多かり、河雁といふ者の如きは其ヲにカ、りし

を、火々出見尊の放ちやり給ふとも見えけり、舊説には、鳧雁の類をいふなりとのみ見えて、疎纂其

物も不詳中略、仁徳天皇の御歌にも、武内宿禰の歌にも、カリと見えたり、まかなるをカハカリとい